

素材ism

漆・陶・金属・テキスタイルによる 豊穡な空間

和太守卑良

WADA Morihiro

小林 伸好

KOBAYASHI Nobuyoshi

水上 修

MIZUKAMI Osamu

原 すがね

HARA Sugane

山中 良子

YAMANAKA Ryoko

安部 定

ABE Sadamu

金子 透

KANEKO Toru

佐々木里知

SASAKI Richi

会場構成：鈴木敏彦(SUZUKI Toshihiko)

グラフィック：上條喬久(KAMIJO Takahisa)

展覧会の概要

工芸コース主任 山中良子

今生活の場で人と人、人とモノ、モノと空間の係わりが希薄になっています。沢山の物に囲まれながら、その中に幾つ心が通うモノがあるでしょうか。そしてそれらのモノが空間と呼応して、心地よい環境をつくっているといえるでしょうか。

そのことが、モノづくりや教育の現場での私達工芸コース教員達の共通の問題意識になっています。いつも新鮮な目で素材と向き合い、伝統的な技法に新しい試みを加えながら、良質な環境を指向するモノづくりに取り組んでいます。

土、繊維、木、金属等の素材が時には複合され、漆、陶、染織、金工等の技法が施されて形となり、空間に同化して人の心と出会う本来の工芸の世界。

モノ離れ、モノの質が地盤沈下する中で、心を込めて作られたモノに出会い何かが始まる。それが今日の閉塞する社会に光を与えるものになればとの願いを込めて展覧会を企画しました。

自分と向き合う一人の空間、人と深く知り合う二人の空間、おおぜいで楽しむ空間、の3種のシーンの仮想空間を設定してあります。何気なく立ち寄って‘ひととき’を過ごし、工芸の素材と手技による豊穡な空間の心地良さを楽しんでいただきたいと願って、1年がかりで実現に漕ぎ着けることができました。

素材ism 展

東京会場：OZONE 6Fリビングデザインギャラリー

会期：2004年9月23日～10月5日

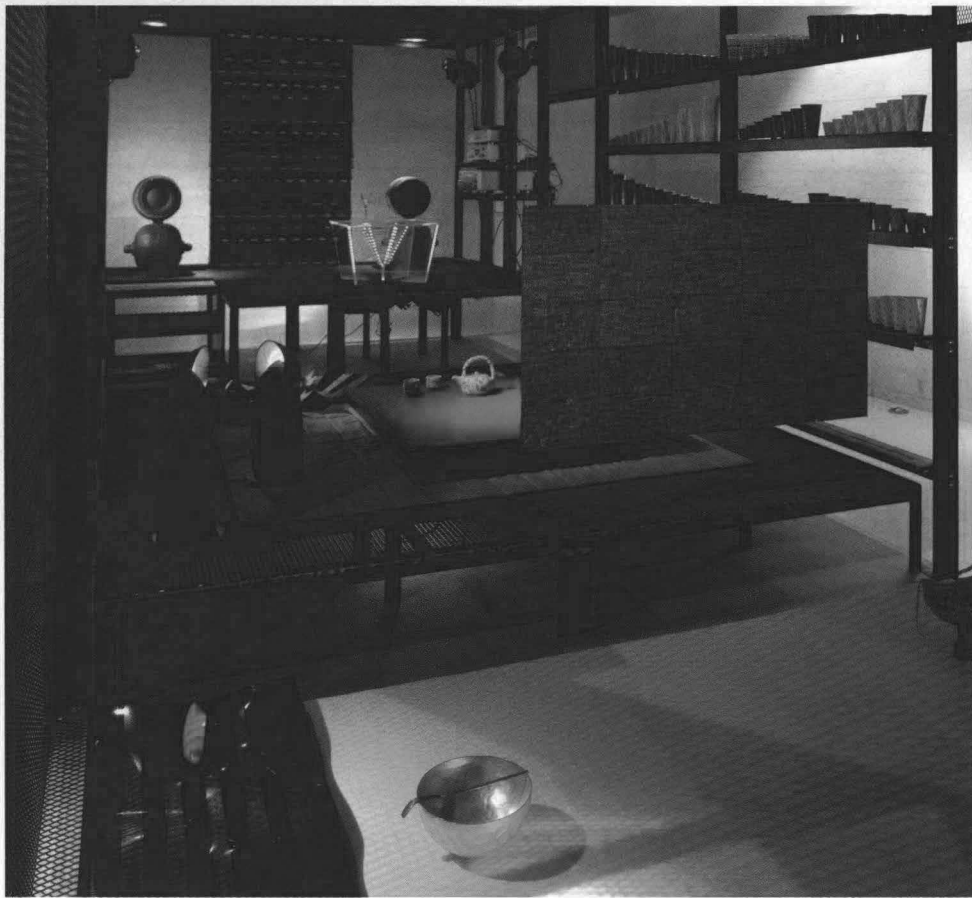
山形会場：東北芸術工科大学 1F ギャラリー

会期：2004年10月26日～11月5日

撮影：ナカサ&パートナーズ

担当：企画—山中良子、渉外—和太守卑良、会計—小林伸好、広報—水上、運搬設置—安部 定

会場設営—金子 透、エントランスGF設営—原すがね、会場運営—佐々木里知



和太守卑良

花燭陶燈 2004

陶器焼き締め 象眼文様

6点組 580~460 215~195 170~155 台幅200mm

二つの形を抱き合うような状態で接合。内部に文様を施し、光によってその文様が浮かび上がる。その文様と光の効果が柔らかくなるよう、焼成温度を低くした。ハローウィンの子供行列をイメージして作ってみたが……。



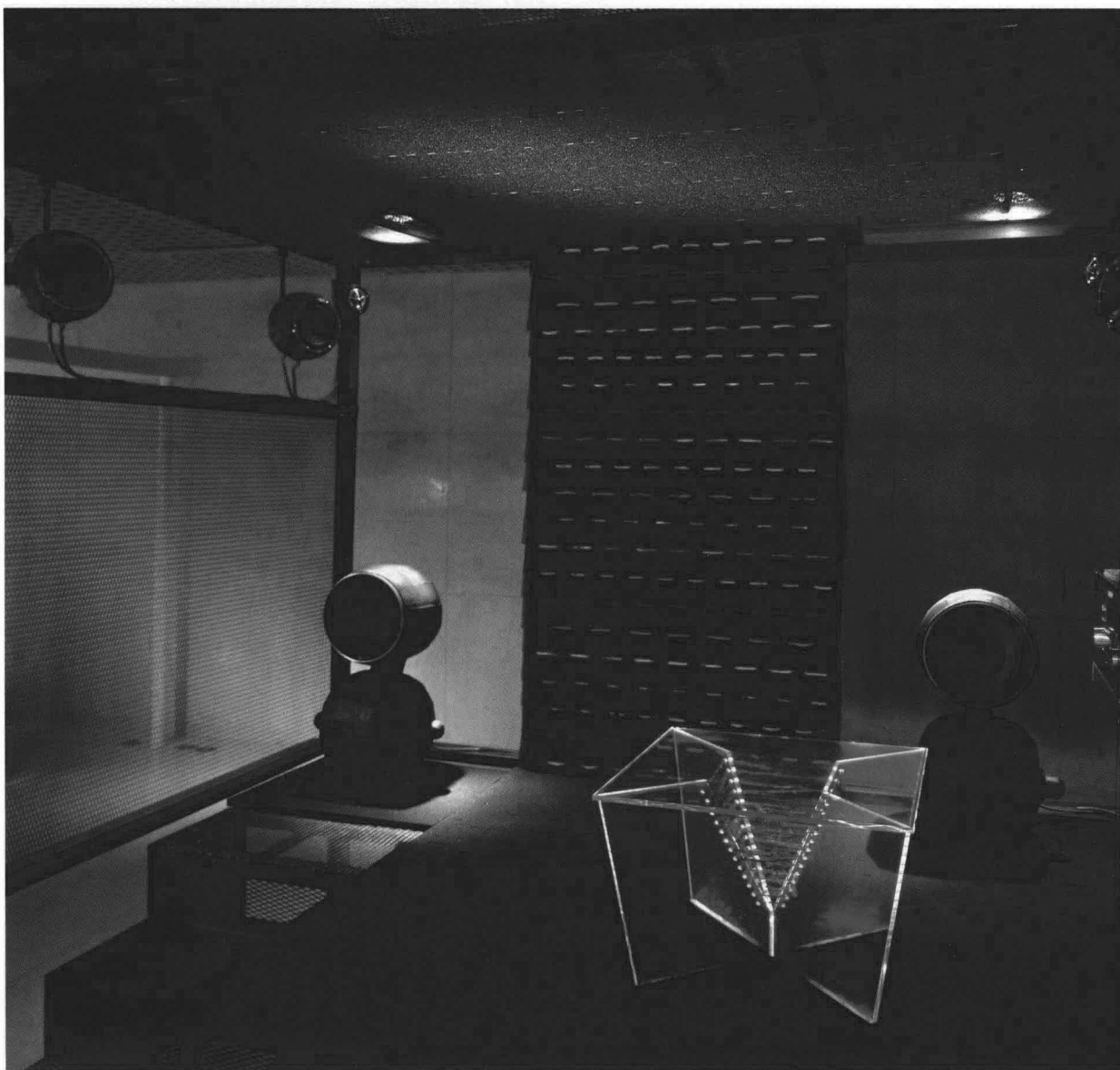
花燭陶燈

山中 良子

Paradox of shadow³ 2004

床：ウレタンフォーム 20mm カット 1700×1900mm
ウォールスクリーン：ELファイバー・ウレタンフォーム
縫 1000×1800
天井：ウレタンフォーム 5mm 縫 1700×2600
テーブル：アクリル 10mm・スリムライン・絹屑糸結束
縫 600×600×400

寂光を内包する蔭の表情。
蔭のはざまに色彩をおびた光が
リズムカルに行き交う。
蔭は軟らかく触覚のかすかな異相を表す



Paradox of shadow³

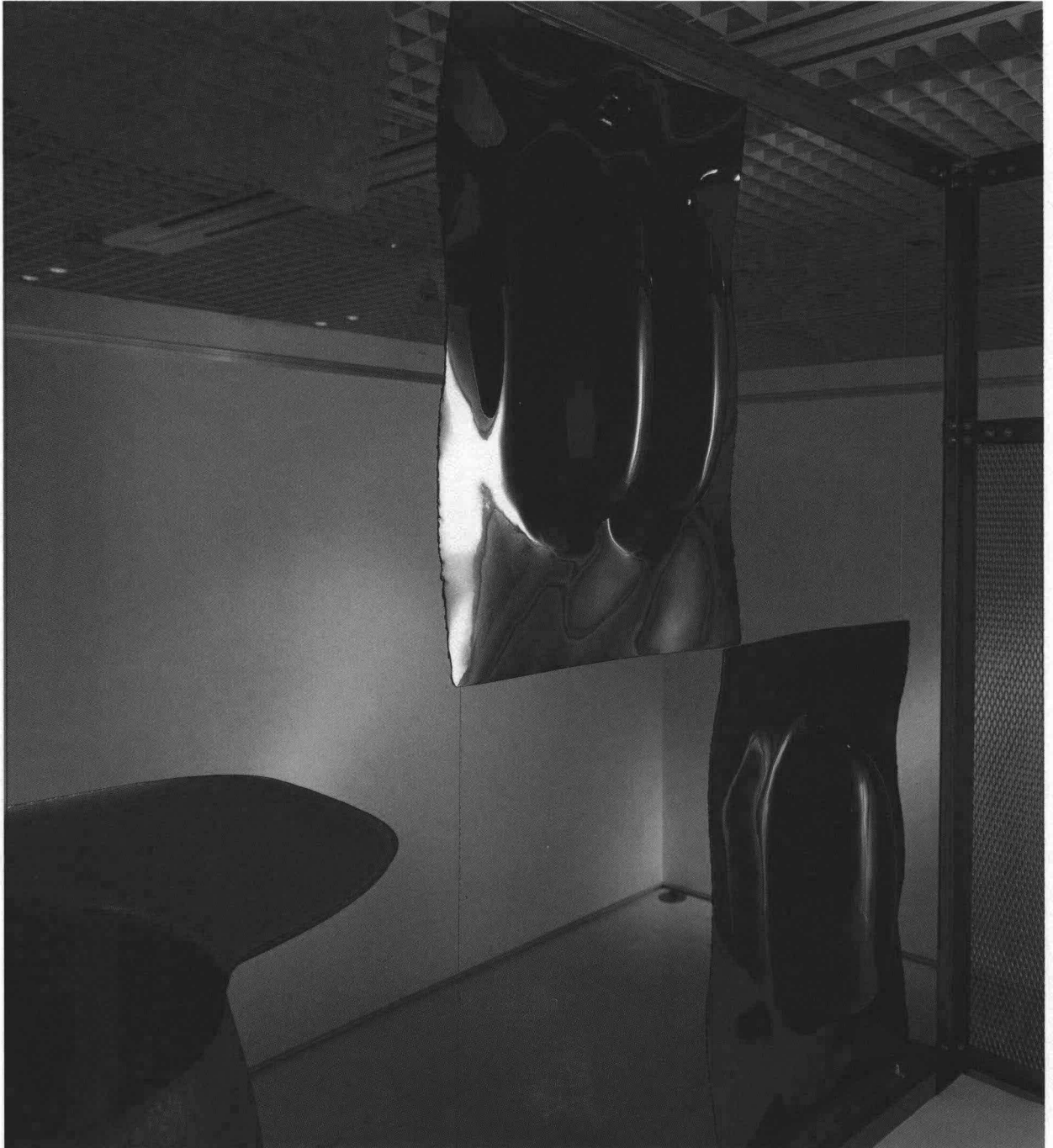
小林 伸好

俯瞰／風の通り道 2004
漆、麻布（乾漆技法） 600×900×150mm

赤い山 2004
漆、麻布（乾漆技法） 60×120×70mm

向こう板—大地の風 2004
漆、麻布、木（木芯乾漆技法） 850×300×70mm

大空から大地を見下ろすと大地の柔らかなうねりの中に山が一つ、二つ。悠久の時間と空間で造られた大地の間に風が湧き上がり、吹き抜ける。そして、消え、また静寂の大地に帰ってゆく。



俯瞰／風の通り道

安部 定

サウンド・スカルプチャー 2004

サブウーファー（低音域）鉄（4.5mm厚鋼板）

720×450×450mm×2台

スピーカーコーン（250mmサブウーファー）

ミッドバス+トゥイーター（中・高音域）

鉄（4.5mm厚鋼板） 260×330×200mm×4台

スピーカーコーン（170ミッドバス+35mm

トゥイーター）鉄鍛造、溶接、機械加工

単に装飾的器物制作にとどまらず、新しいテクノロジーと造形とがコラボレートする世界を目指した。そして音響機器メーカーの協力を得て、最高音質のオブジェ型スピーカーが完成した。鍛金造形の新しい可能性が引き出せたと思う。



サウンド・スカルプチャー

水上 修

朱紐目テーブル／螺鈿パネル 2004

朱漆、紐（綿） 1050×1050×43mm

メキシコ鮑貝、鮑貝 1200×700×15mm

工芸は、素材をいかし表現されているかが大切な要素である。漆芸においても漆の様々な表情や肌合いと、併用する金属粉（蒔絵）、貝（螺鈿）、金属板（平文）等の素材をいかしながら融合できるように制作を続けている。



朱紐目テーブル
螺鈿パネル

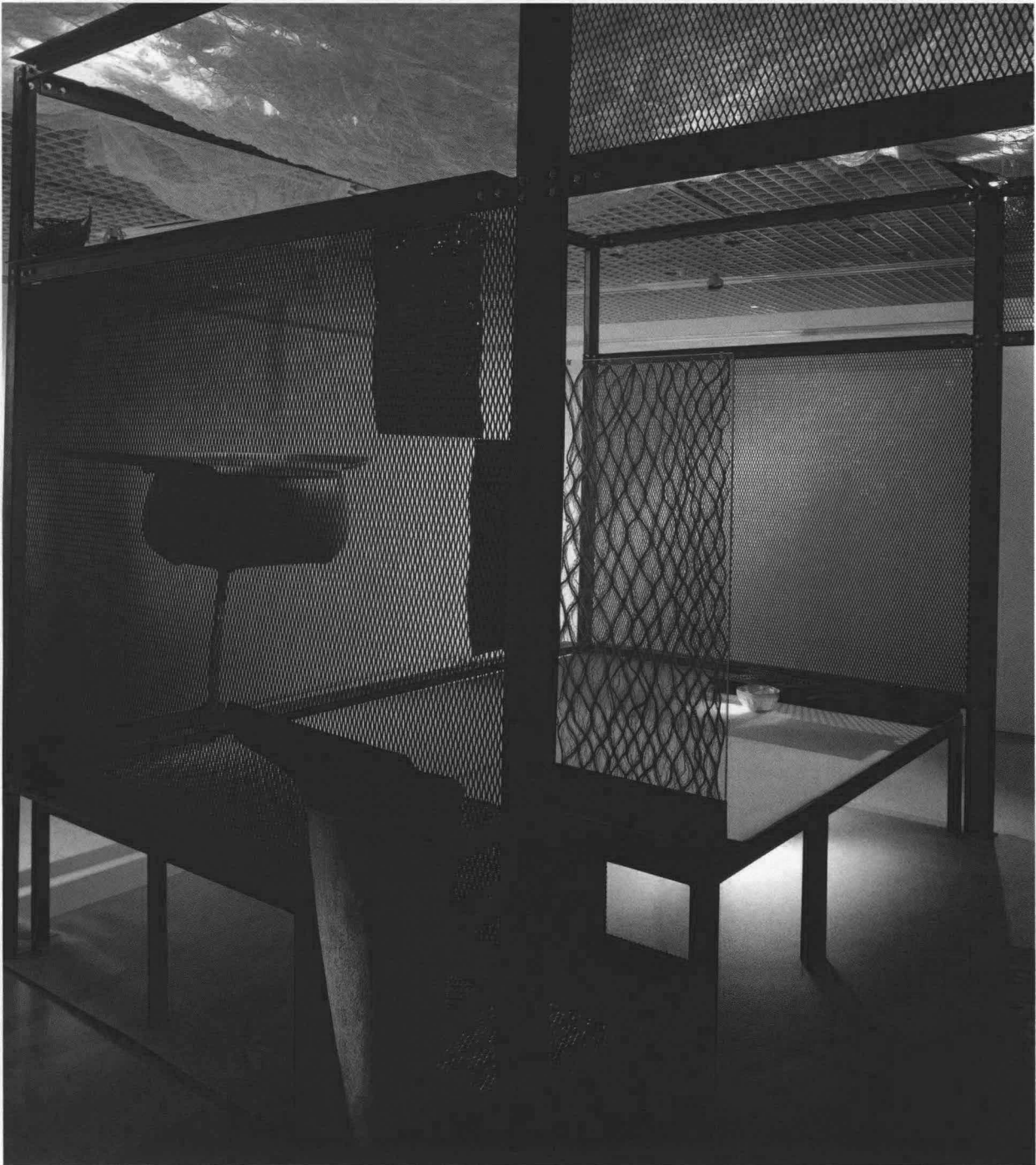
金子 透

手水鉢／蹲 2004

手水鉢 540×990×330mm

蹲 270×740×820mm

金属板を叩き延ばし、変形させてかたちを作ることを鍛金を云う。叩くと硬くなり火あぶりすると柔くなる、そんなことを何回も繰り返しながら徐々に思い描いたかたちになっていく。今回の手水鉢、蹲はこのように作った。素材は銅板、この素材が生活の風景を変えてくれるのではと思う。



手水鉢
蹲

原 すがね

水へのオマージュ 2004

天蓋：シルクオーガンジーにスクリーンプリント

・塩縮加工2400×600mm

風炉先屏風：水溶性生地にレーヨン糸でミシン

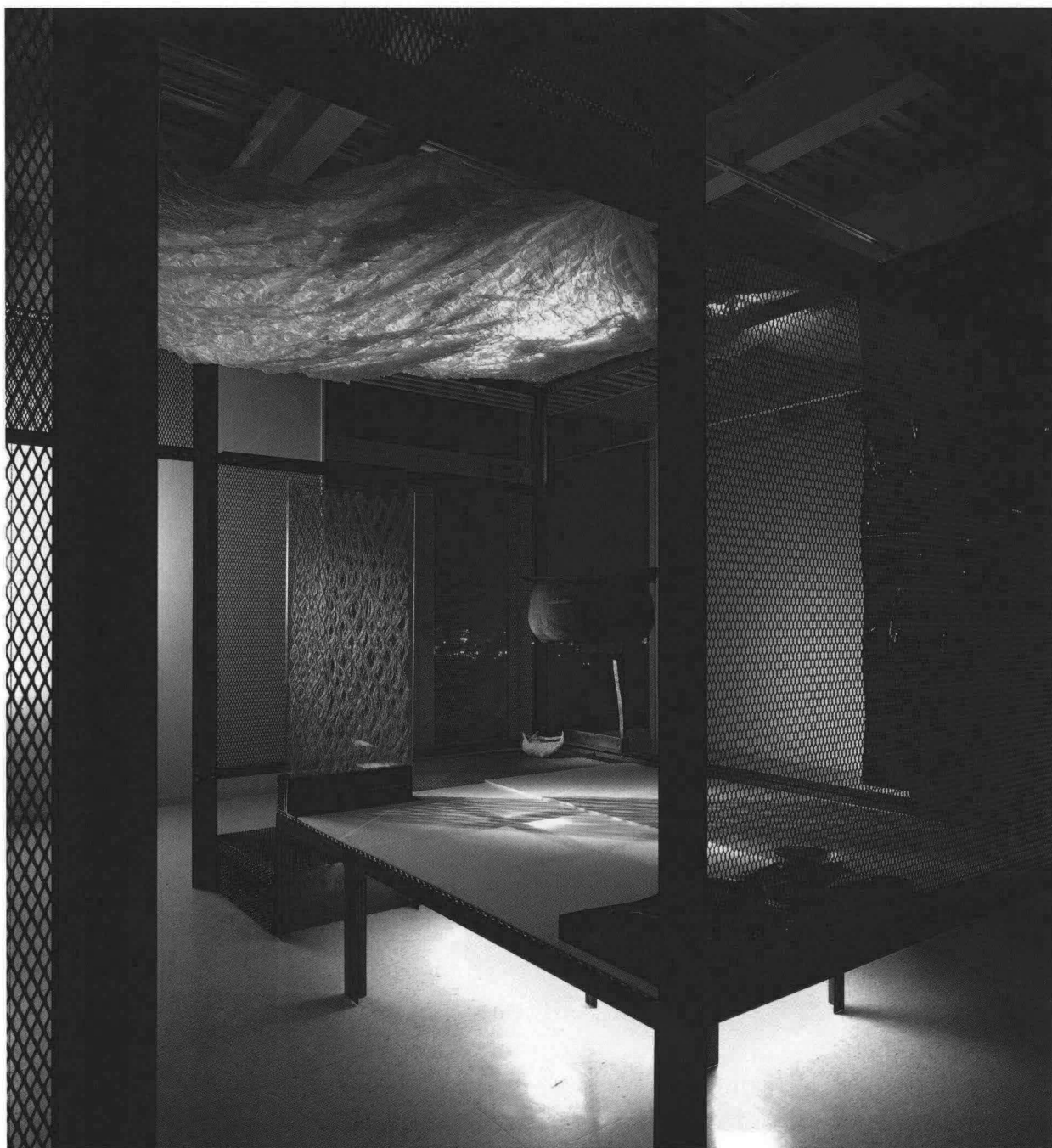
・ステッチ ガラス 1200×500mm

オブジェ3点：籐・銅線・ファブリックなど

"Far Sea" H120×W270×D280mm、"Vessel of Life"

H250×W250×D250mm、H180×W220×D150mm

「二人」は出会いの最小単位、出会いがあつてこそ何かが生まれる。茶席にはまず清らかな水ありき。その水は生命の起源でもある。清流が湧き出るように、天蓋が硬質な空間を浸食し、源には舟形のオブジェ、そして風炉先屏風にも水面を映し、水へのオマージュとした。



水へのオマージュ

佐々木里知

器のグラデーション

2004

80×80×60～230mm 13個×4種

80×80×70～130mm 8個×8種

陶器・半磁器 泥燻、鑄込み、色絵、プラチナ彩

「私たちを包み込んでいる空気にはエネルギーが潜んでいて、いつも刺激を与えてくれる。」 器を並べて、いろんな音や香り、会話や表現などを楽しめる空間を創造しましたが、やはり素材の装飾に遊んでしまいました。



器のグラデーション

素材ism

漆・陶・金属・テキスタイルによる 豊穡な空間

出品者

和太 守卑良
山中 良子
小林 伸好
安部 定
水上 修
金子 透
原 すがね
佐々木 里知

会場設計

鈴木 敏彦

グラフィック

上條 喬久

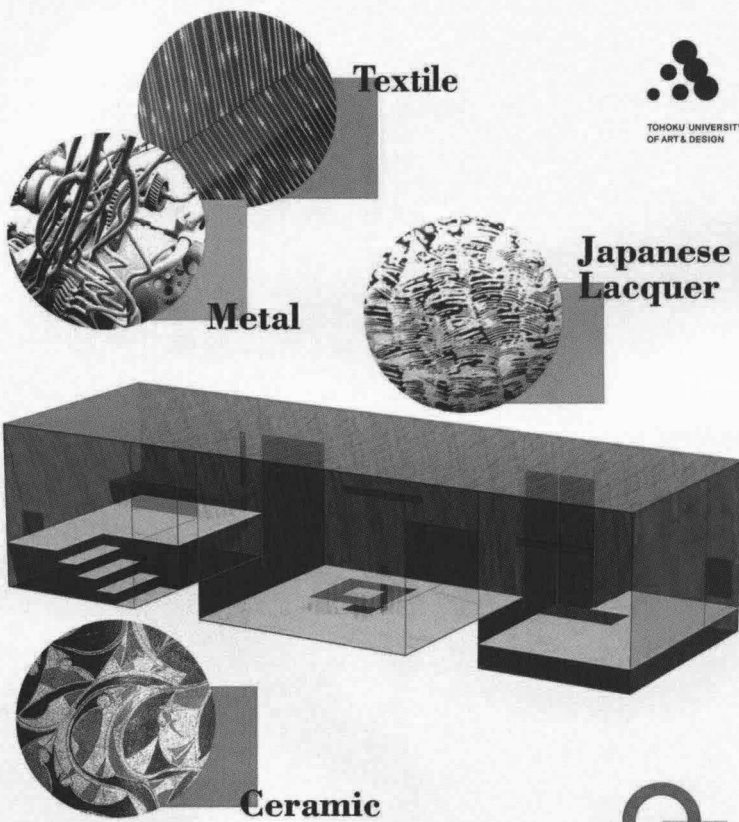
2004年9月23日[木] - 10月5日[火]
(水曜日休館) 10:30a.m. - 6:30p.m.

OZONE

6F リビングデザインギャラリー



TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN

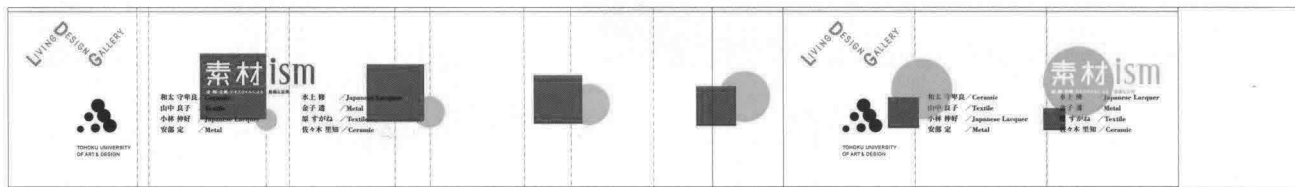


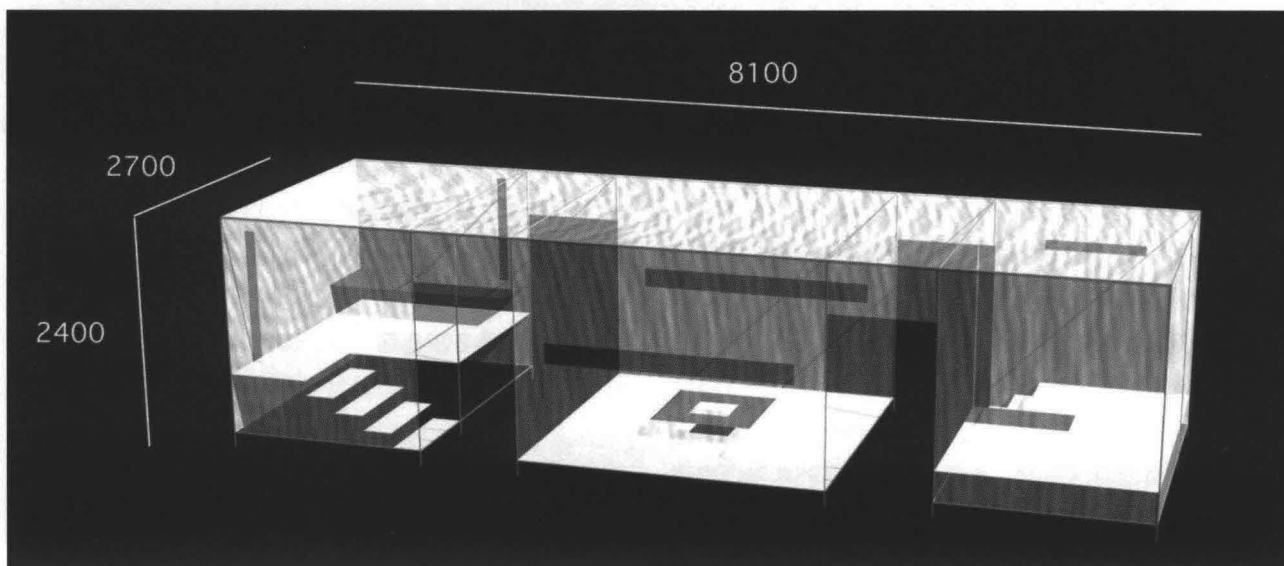
ポスター D.M

上條 喬久

「素材ism」のグラフィック

グラフィックに於いても「素材」は大切な要素である。「素材ism」のグラフィックは、素材感を強く出したものにしたかった。素材感のある紙を使用して、1色刷りを提案したが、予算では希望の紙が使用出来ず、やむをえず2色刷りとした。その点、素材感が希薄にならないように、ゴツンとしたロゴタイプをデザインし、それを会場のウィンドウにも使用すると、先生方の様々な素材とも矛盾なく響きあっていったようで、ほっとした。





会場CG

鈴木 敏彦

空間構成のイメージ

全体は、会場の中央に少し斜めに配置された、間口8.1M、奥行き2.7M、高さ2.4Mの家のような骨組みと、その家の床、壁、天井という建築的部を構成する工芸の作品群から成る。

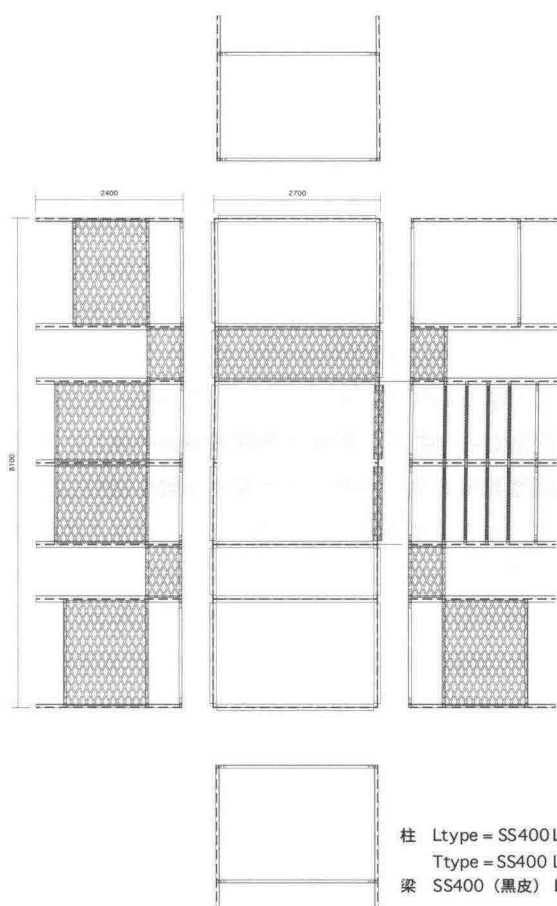
外観は、夕闇にぼんやりと浮かび上がる一軒の家。

内部には、2本の道が通り庭のように貫通し、全体を三つの空間に分節する。

三つの空間は、広さと高さが異なる三つのへやとなり、それぞれにテーマが与えられた。建築的イメージとしては、書斎、2畳の草庵茶室、そして民家のいろいろの間を思い浮かべた。

外からは、概ね透けて見える。それぞれのへやへは、通り庭を通過してアクセスする。来場者は、周囲をめぐる、中をのぞき、通り庭を抜けて、へやにあがる。

まさに建築と工芸が統合した、アーキテクチュラル・プロムナードを回遊する。



柱 Ltype = SS400 L4*50
 Ttype = SS400 L4*50+FB4.5*50
 梁 SS400 (黒皮) L3.2*50*50折り曲げ

美術科工芸コース

和太守卑良教授・山中良子教授・小林伸好教授・安部 定助教授

水上修助教授・金子透助教授・原すがね助教授・佐々木里知講師

会場構成：鈴木敏彦助教授（生産デザイン学科）

グラフィック：上條喬久教授（情報デザイン学科）